

教祖140年祭
三年千日の
活動方針

「教祖のひながたを目標に
全教会心定めの達成」
めどう

11月 月次祭

世話人 久保善平先生 御巡教

◆おちばの理を頂戴し、勇みの種を頂いた。

～教祖140年祭～

立教189年1月26日

※年祭当日（1月26日）の別席・お誓いはありません。

その日以外は通常通りです。



大教会のHPがご覧になれます！

月報には掲載されない写真もいっぱいです！

ぜひ一度ご覧下さい♪

網走月報

発行所
天理教網走大教会
布教部出版広報掛
〒093-0073
網走市北3条西6丁目
TEL 0152-43-2227
FAX 0152-44-2227

大教会十一月月次祭

大教会11月の月次祭は、12
日午前9時30分から大教会長
祭主のもと、執行された。

大教会長は祭文で、親神様
の御守護に御礼申し上げた後、
「今日のこの日は、有難くも
世話人久保善平先生の御巡教
を賜り、おつとめ奉仕者を先
頭に、参拝者一同心を揃え一
手一つに十一月の月次祭をつ
とめさせて頂きます。また、
月の初めには、第五回ようば

く一斉活動日に、網走に繋がる
用木が挙って参加させて頂
きましたこと心より御礼申し
上げます。私共を始め教会長、
ようばく一同は、年祭活動も
いよいよ残すところ三ヶ月を
切るなか、諭達の実働に拍車
をかけ、心定め達成へ向け、
年祭当日まで走り抜ける覚悟
でございます。」と奏上した。

を偲ぶためにつとめる年祭と
は意味合いが異なります。
教祖は、お姿こそ私たちの
目に見えませんが、今もなお
ご存命でお働きくださってい
ます。ですから、年祭という
同じ言葉を用いているものの、
亡くなられた方、故人を偲ぶ
年祭とは明らかに違いがあり
ます。

神殿講話

世話人・久保善平先生



神殿講話抜粋

ご苦労様でございます。今日
は時間を頂きましたので、思
いますところをお話しさせて
いただきますと思います。ど
うかしばらくの間お付き合い
をいただきたいと思います。

三年前の十月二十六日、「諭
達第四号」をご発布頂いて以
来、私たちは教祖百四十年祭
を目指して歩みを進めてまい
りました。その教祖百四十年
祭まで、いよいよあと二ヶ月
余りとなりました。

教祖の年祭は、私たち人間
が故人となった親や先祖様

明治二十年陰暦正月二十六
日。「世界一れつの人間をた
すけたい」との思召しから、
二十五年先の定命を縮めてお
姿をお隠しになられた子供可
愛い一条の親心にお応えさせ
ていただきたいと、この道を
歩むお互いが成人の歩みを進
めようとの思いで、一手一つ
につとめ励むところに教祖の
年祭の意義があるということ
は、皆さんもよく承知してく
ださっていることだと思いま
す。

しかし私は、たとえ意味合
いは異なっているも、人間が、
自分の親やおじいさんおばあ
さんの年祭を我が事としてつ
とめるように、教祖の年祭を、
私たち教祖にお導きお育てい
ただくお互いが、我が事とし
てつとめることが大切だと
思っています。

が教祖が現身をお隠しになることに繋がるとは思ひもせず、「扉を開いてろくちにならしくだされたい」と返事をなされたのであります。

教祖が人々に急ぎ込まれていたのは、何が何でもおつとめをつとめるということでありました。しかしおつとめをつとめることは、教祖が望みくださっていることだ、大切なことなんだとわかっていながら、人々は素直に実行することができなかつたのです。

そこには、「おつとめを堂々とつとめれば必ず警察がやってくる。そうなれば自分たちをたすけてくださった何よりの恩人、生き神様である教祖が連れて行かれる。しかもその教祖は、ご高齢でご身上である。だからそれだけはどうしても避けたいし、避けなければならぬ。」との考えがあったのだと想像いたします。

教祖の身を慮るが故の人々の思案と、おつとめを実行すること、教えを教え通りに実行すること、何を何よりも求めらるる教祖の思召とは、同じような方向を向きながらも大きな開きがあったと言えるでしょう。その開きが、教祖と

初代真柱様との問答などを通して、少しずつ縮まってきたのだと思います。

こうして、いよいよ正月二十六日を迎えることになりました。二十六日はそれまでも、毎月おつとめをつとめてきた日ではありましたが、人々はこうした状況の中でもつとめるべきなのかどうか思案に暮れ、神様の思召を伺われました。

そこで頂いたお言葉は、「もう悠長なことを言っている場合ではない。お前たちは法律が怖いのか、神の話が尊いのか、どちらに重きを置いて信心しているのだ。親神の思ひは、前々から十分に説いてきている時ではない。これだけ言ったら分かるだろう」という意味のものでした。

人々はこれでいよいよ心が定まり、初代真柱様の「おつとめの時、もし警察よりいかなる干渉あつても、命捨ててもという心の者のみ、おつとめをせよ」との言葉のもと、意を決しておつとめにかかられました。

この時のおつとめは、形の上では必ずしも教えられた通

りの姿ではありませんでした。人々の心の真実をお受け取りくだされたのでしょうか。日中に堂々とつとめたにも関わらず、警察がやってくることはなかつたのであります。

しかし、人々が思いもしなかつたことが起こりました。それは、ちょうど十二下りの最後のお歌が終わる頃、教祖が現身をお隠しになられたということでした。二代真柱様の著書である『ひとことはなし その二』という本の中に、当日の様子が記されていますので、それを参考に少しお話をしてみたいと思います。

その頃教祖は、明治十六年に建てられたご休息所という建物で毎日を過ごされていました。

始終お世話をなされていたのは、教祖の長女おまさ様と孫の梶本ひさ様（教祖の三女おはる様の娘様）でした。ご気分が悪くなられてからは、初代真柱様もおそばにおられたようです。その頃十歳ぐらいたったたまへ様（長男秀司様の娘様で、後に初代真柱様のご夫人となられた方）であります。この方は教祖の様子が気になって、中を見ようと

障子を開けては叱られたんだと語り遣しておられます。

正月二十六日のおつとめは、もちろんちばのところでつとめられました。今、記念建物の一つとして残されているつとめ場所は、かんろだいがここにあつたという場所が建物の中にありますが、これは後に増築をされて取り込まれたのであります。明治二十年当時かんろだいは、つとめ場所の外にあつたのであります。かぐらづとめは、かんろだいを囲んで。十二下りは南から北向きに（今、本部の神殿でつとめておられるのと同じ向き）つとめたということです。

おひさ様が言われるには、陽気なおつとめの声を聞いて、教祖は心地よさそうにお休みになつておられたので、おそばにいたおまさ様は参拝に出ていかれました。

そして、「だいくのにんもそろひきた」と十二下り目が終わる頃、教祖がちよつと変なそぶりをなされたので、おひさ様が「お水ですか？」と尋ねたが返事はなく、それでも水を差し上げると三口召し上がりました。「おばあ様」と重ねて呼んでも返事はあり

ません。そこで「誰か居ませんか。早く真之亮さんと呼んできてくだされ」と叫ばれたのであります。そうこうしているうちに、おまさ様や初代真柱様が戻つて来られたのであります。

一方、おつとめに出られたたまへ様は、おつとめが終わると、「教祖はもう良くなつてくださったかな。ご飯も召し上がつてくださったかな。」とご休息所へ戻られました。「仰せ通りにおつとめをつとめたのだから、教祖の身上は良くなっているに違いない。」これがおつとめをつとめた人たちの、正直な気持ちだったと想像をいたします。

しかし結果は違いました。たまへ様がお部屋を覗くと初代真柱様に、「早よ来い」と呼ばれ、おひさ様から「おばあ様がこんなにいられた」、「冷たいんやな。おばあ様はもの言わはらへんねがな」と言われ、教祖が現身を隠されたということを知った、というのであります。

たまへ様は「子供心に、今にも天地が闇になるかと思ひながら、まだ明るいまだ明るいと思つた」と語られていた

元々は教祖の年祭も、皆、我が事としてつとめておられたと思います。しかし、教祖が現身をお隠しになられてから年月が経つにつれ、教祖に對しての思ひの持ち方、年祭についての考え方も少しずつ変わってきているような気がいたします。

今申した、教祖の年祭の意義は知つていながら、大切だと思ひながら、どこか我が事から遠くなつてきている気がするのです。

真柱様は、立教百八十五年、年頭のご挨拶の中で「私たちが先人の苦勞を忘れ、結果として、教祖が遠くなつてしまつたというところがあるのではないかと思うのであります」とお話をくださいました。

私自身の常日頃の通り方の中でも、父や母の姿勢と比べると、教祖が遠くなつていゐるのではないかと反省をするところがあるのですが、教祖の年祭ということに關しても、人間の年祭とは違ふんだということを強調するがあまり、私たちの親である教祖の年祭なんだ、自分の親の年祭なんだという親しみが薄れてきてゐる、そんな感じがいたしま

す。

教祖は、親神様が人間をお創りくださつた時、母親の役割を務められた魂をお持ちの方であります。そして、月日のやしろと定まられてからは、人間の元の親、実の親であらせられる親神様が入り込まれたお方であります。

親神様、教祖にとって、子供である私たちが、陽氣ぐらしへの道を誤らずにたどれるように、自ら五十年に渡つて道を歩んでくださったひなたの親が教祖であります。つまり、教祖は私たちみんなの親であらせられる。自分の親なんだ。こうしたことを何よりも大事にさせていたのだかといと思ひます。

人間の年祭は、故人が出直された日を基準につとめるのですが、教祖の年祭は、教祖がお姿をお隠しになられた日が元一日であります。教祖百四十年祭が近づいた今、今一度、明治二十年陰曆正月二十六日に思ひをいたしてみたいと思ひます。

明治十九年陰曆十二月八日の夕方、教祖は風呂場からお出ましの際にふとよろめかれました。そして陰曆十二月

十一日、急に教祖のご身上が迫つてくるという状況が現れてきたのです。以後、明治二十年正月二十六日に至るまでの一月余り、教祖のご様子は一進一退と申しますか、どんな日もあつたように思ひます。

そうした中、当時のお屋敷の人々は、つとめの実行を急ぎ込まれる教祖のお心をひしひしと感じながらも、官憲の干渉との間に挟まれて、なかなか思召通りに通り切れない日々を過ごしておられました。

その様子は、『稿本天理教教祖伝「第十章 扉開いて」』に記されている通りであります。

陰曆十二月二十日には、初代真柱様が直接教祖と問答をなされ、その中で「親神様の仰せと国の掟と、両方の道の立つようにさしづをお願ひします」と自らの苦しい胸の内を打ち明けられました。

すると教祖は、「親神の話をしつかり聞いて心を定めることが一番大切なのだ。今という今、抜き差しならぬ時にあつては、心を定めることが一番肝心である。心さえ定まれば、道はいずれ開けてく

る」という意味のお話をしてくださいました。

さらに、だんだんと問答が積み重ねられていく中、初代真柱様はついに、「この屋敷に道具雛型の魂生まれてあるとの仰せ。この屋敷をさして、この世界始まりのぢば故天下り、無い人間無い世界を拵え下されたとの仰せ。かみも我々も同様の魂との仰せ。この三ヶ条の訪ねがあればなんと答えれば良いのですか。人間は法律に逆らうことは出来ないません。」と当時の人たちにとつて一番苦しいところを口に出し、どうすれば良いのかと縋り付かれたのです。

そして、この時くださつたお言葉が、「さあさあ月日がありてこの世界あり、世界ありてそれぞれあり、それぞれありて身の内あり、身の内ありて律あり、律ありても心定めが第一やで」というものであります。

これは何よりもまず、親神様がおられてこの世界が生まれ、そして、世界が生まれてから国々ができ、そこに人々が親神様から身体を借りて生活をしている。その人々が住み暮らしやすいように申

し合わせて作つたものが法律である。そこにどんな法律があつたとしても、それを活用するかどうかは人々の心の問題である、という意味だと思ひます。

つまり、親神様が人間世界をお創りくださつたことが全ての元である。そしてどんな状況にあつても、一番大切なのは人々の心なんだ。この一連の順序を胸に治めて、親神様に通じる心をしっかりと定めることが何より大切だ、と教えてくださったと悟るのであります。

この問答のあつた日以降、教祖は小康状態を保ちながら毎日をお過ごしくださり、陰曆正月元旦には、随分ご気分もよろしくなられたのであります。

ところが正月二十五日夜、教祖のご身上はよろしくなく、人々は飯降伊蔵先生を通して神意を伺われました。その時のお話の中で、「さあさあ扉を開いて地を均らそうか、扉を閉まりて地を均らそうか均らそうか」とのお言葉がありました。一同は、扉を開く方が陽気でよからうとの思ひがあつたのか、まさかそのこと

の道の信仰の上で欠かすことができないと皆承知をしているのです。だから、必ず教祖はご存命だということを人に説明するように心がけているでしょう。

では、教祖がご存命でお働きくださっているということとをどんな時に感じますか、と問われたら、どう答えるでしょう。私は自分が教祖殿で参拝をしている時に、それを実感することがあるのです。教祖殿には毎日たくさんの方が参拝に来られます。参拝に行った時、合殿にも御用場にも、自分以外に誰も人がいないということは、日中ならあまりないような気がいたしました。参拝に来られる人の中に、はお礼を申し上げる人、相談をなさる人、また継りつくようにたすけを求める人など、いろいろな方がおられるでしょう。

私も、その時その時で中身は異なりますが、いろんなことを申し上げているのであります。教祖なら何でも聞いてくださるに違いないと思い、人には言えないことでも申し上げることもあります。

そうして参拝をしている時、

私は周りで他に参拝している人がいても、あたかも自分が教祖と一対一で話をしているような気になります。周りにどれだけの人がいようが気にはなりません。

きつと教祖も同じ時に何十人、何百人の人が参拝していたとしても、それぞれの話を、皆一対一で聞いてくださっていることでありましょう。

私はこれも、現身をお隠しになられて世界たすけに踏み出された一つの証ではないかと考えるのであります。

もし今、教祖のお姿をこの目で拝することができるなら、やっぱり直接話を聞いていたきたいと思います。並んで順番待ちだっと思っています。でもお姿を隠された今は、その必要はありません。いつでも、誰でも、どこにいても、その気になれば教祖とお話することができるのであります。これも、ご存命でお働きくださるからこそのことだと思います。

教祖が今尚、ご存命でお働きくださる。そのことを実感をすることは、私たちの信仰の大きな力となります。しかし何の努力もせずに、「実感

したい実感したい」と呟いているだけでは、なかなかその機会はやってこないと思います。

教祖のお働きを自分の身に感じるためには、やはり親神様の教えを実践する努力、身に行う努力が欠かせません。

中でも、おつとめをつとめ、おさづけの理を取り次ぎ、にをいがけおたすけに励む中でこそ、教祖のご存在を感じさせていただける機会を頂戴できるのだと思います。

ここで私が初めて、にをいがけおたすけに際して、教祖のお働き、またちばのありがたさを実感した話を少しさせていただきます。思います。

私は生まれた時からお道の環境の中で育ち、高校まではずっとおちばの学校に通っていましたが、言葉の上では少しは教えを知っているつもりでありました。そうした中、二十四歳の時に布教の家にいられてもらいました。三十年以上も前の話です。

布教の家での一年間は、人をお連れしてでなければおちばへ帰ることができません。いくら通い先ができて、「是非おちばへ帰りましょう」と

いう一言が言えなければ次に進めないのです。

この時になって初めて、自分が親神様、教祖、ちば、そうしたところに、どこまで自信を持つて人に話ができるのかということに向き合うことになりました。

ちばには、私たち人間の元の親、実の親であらせられる親神様がお静まりくださり、子供である私たちが、親里へ帰ってくるのを楽しみにお待ちしております。

私たちはその親の元へ、すなわち親里へ、親を慕って、親を頼りに、真実の心を持つて帰らせていただくのです。それがおちば帰ります。

こうして帰ってくる子供と、帰りをお待ちくださる親の双方の心が通い合う時に、親神様は不思議なめずらしいすけをお見せくださるのであります。私も、そういう話は何度も耳にしたことがあります。でも実際に、そのありがたさを肌で感じたことは、それまでは一度もなかったのです。

ちょうど、教祖百十年祭の三年千日の一年目でした。布教の家にいたおかげで、年祭

を意識して毎日を過ごすことができていたように思えます。しかし、だからと言って簡単ににをいがかり、おちばへ帰ってくれる方をお与えいただけるわけはありません。子供おちばがえりなど、団参というような形で帰ることとはできたのですが、自分が直接にをいをかけた人を誘ってのおちば帰りはなかなかできませんでした。

それでも、布教の家での生活が終わる三月になって、ようやく通い先の人がおちばに帰ってくれることになりました。その方は、ひどいヘルペスを患っておられまして、家において話をしていても、十分十五分と話をしていると、一度は必ず痛さで顔を歪めるという感じでありました。毎回おさづけの理を取り継がせていただくのですが、「おかげで痛みがマシになった」と言ってくくださる日もあれば、「拜んでもらってもあんまり変わらない」と言われることもあります。

この時のおちば帰りは一泊二日で、その帰りの電車の中でのことです。あれこれ話をしながら、ふとあることに

そうです。そして、長らく閉め切られていた襖が開けられた時、そこでは榊井伊三郎先生、梅谷四郎兵衛先生のお二人が泣き崩れておられたのであります。

また、その日のおつとめに出ておられた高井直吉先生の思い出話によると、「この日は公然と日中におつとめをし、たくさんの方がお参りしたのに、最後まで一人の巡査も来ず、不思議なことだったと喜んでいたら、『今教祖がお隠れになった』、との知らせが入った。お参りに来ていた人たちは口々に『ワー』と言ったがそれきりで、後は誰も何にも言わない。黙ってしまつて、咳一つする者もなかった」。そんな様子だったようです。

またご休息所の縁側では、郡山の初代・平野櫛蔵先生が、「俺はうちへ帰れん」と頭を抱えておられました。高井先生がその訳を尋ねると平野先生は、「教祖は百十五歳が定命とおつしやった。俺は、めつたに神様の話に間違いはない。きつとよくなると信じていたし、人々にも話をしてきた。もし違ったら俺の首やる、とま

で言ってきたんや」と言われたのです。

こうしたお話には、当時の人たちの信仰の様子が大変よく現れていると思います。

真実の親として、また地上の月日として崇めお慕い申したい教祖が、現身をお隠しになったことを聞いた時、もうこれまでのようにお声を聞くことができないと知った時の衝撃は、教祖のお姿を拝したことのない私たちには想像もできない大きなものだったと思います。

今もありましたが、人々は「教祖は必ず百十五歳までおいでくださる」「こうしておつとめをさせていたいたんだから、必ず元氣になつてくださる」と信じていたのでしょ。稿本教祖伝には、「全く、立つて居る大地が砕け、日月の光が消えて、この世が真つ暗になったように感じた」と記されているのです。

そうした中、飯降伊蔵先生を通して伺われたおさしづで、「子供可愛いばかりに、その心の成人を促そうとして、まだ二十五年ある命を縮めて身を隠したのだ。今から世界を駆け巡つてたすけをする。今

までとこれから先とどう違ってくるかしつかりと見ていよ。昨日、扉を開いて地を均らそうか、それとも閉めて地を均らそうかと尋ねた時に、開いてくださいと言ったではないか。親神は心通りに守護したのである。さあ、これまでは子供にやりたいもの（これはおさづけのことです）もあつたが、思うように授けることができなかった。これから先だんだんに渡していこう」という意味のお言葉を頂戴なさったのです。

このお言葉を通して、教祖は子供可愛い故に姿を隠されたこと、たとえ姿を隠されても世界を駆け巡つて一れつをたすけるためにお働きくださること、つまり、これから先は扉を開いて世界たすけにご存命のままお働きくださることをお教えいただいたのであります。

このことが人々の心に治まるまでには、時間を要したかもしれません。しかし「扉を開いて働いてくださる」「姿は見えないけれど働いてくださる」ということを頼りに、ご存命の教祖をお慕いして通るといふ信仰姿勢が、この時

から始まつていったのです。

今を生きる私たちも、「教祖は人々の心の成人を促そうと、その現身をお隠しになられ、世界たすけにお踏み出しくださいとんだ」「教祖はお姿こそ拝せないものの、今尚ご存命でお働きくださっているんだ」と聞かせていただき、そのことを信じてこの道を通っているのです。

しかし、教祖はご存命だといふことを信じることは、年月が経つとともに難しくなつてきているのではないかと思ふことがあります。また、それを信じる力が年々弱くなつてきているということも否定できないように思います。

先ほど来お話した事柄は、教祖五十年祭の頃に二代真柱様が、たまへ様や高井先生に聞かれたのであります。その頃はまだ、明治二十年の様子を直接知っている人が、少ないながらも残つておられました。

それから九十年近くが経っているわけですから、もちろん今は、明治二十年を知っている人は誰もいません。教祖五十年祭の頃の様子をはつきり覚えていっている人も、ほ

とんどおられないでしょう。それでも教祖は、今なおご存命でお働きくださっているのです。そのお働きは、お姿をお隠しになられて以来、少しも変わっていないのです。そのことをひたすら信じて通ることが、私たちの信仰の源であると申したいのです。

さて皆さんは、初めておちばに帰られる方を案内する時、本部の教祖殿で、教祖のことをどのように説明されるでしょうか。もちろん、月日のやしろとして親神様の教えを私たちに教えてくださった方である、ということはお話されるでしょう。そして、今もご存命でお働きくださっているんだ、ということも必ず説明をなさると思います。

今もここにお住まいくださつて、三度のお食事からお風呂、ご寢室に至るまで、お姿があるのと同様になさっているんですよ、というようなことを説明されるのではないのでしょうか。その時、教祖のお社の前に赤衣が見えれば、そのことについてお話をされる方もあるかと思ひます。

教祖がご存命でお働きくださっているということは、こ

気が付きました。「そういえば、この人この二日間一言も痛いと言わなかったなあ」と。そのことを本人に伝えると、とても不思議そうな顔をして、「そういえばそうやなあ。全然痛みがなかったわ」と自覚をされたのです。

「ほんまに鮮やかやなあ」と思わずにはいられませんでした。おぢばに帰ってくださったことに、親神様、教祖の元に帰らせていただいたことに、鮮やかな印をお見せくだされたのであります。

「親里ぢばはたすかるところ、たすけてくださるところ」というのは本当やな。親神様、教祖は、子供が帰ってくるのを楽しみにお待ちくだされているというのはほんまなんやな」と心からそう思いました。それ以降も、こうしたありがたさを感じることに出会ってはいのですが、最初に実感できたのはこの出来事だったように思います。

やはり、頭で理屈を考えるだけでなく、にをいがけ・おたすけに一生懸命になっている時にこそ感じさせてもらいやすいように思います。

以降、百二十年祭、百三十

育て方が随分変わってきていると思いますが、子供を育てるにあたって、一度も注意をしたことがないという人はいないように思います。注意の仕方は人によって違うでしょう。厳しく言う人もあるでしょうし、優しく言う人もあると思います。でも、いずれの場合も子供の側から見れば、注意をされるということは、自分のしたことを、ある意味否定されるのですから面白いことではありません。嫌な思いをするのだと思います。

でも親は、このままでは子供の為にならないと思うから意見をします。憎いから注意をするのはありません。嫌いだから叱るのでもありません。それは、可愛いからこそ、子供のためを思うからこそ、子供のためであります。

親神様、教祖も同じだと思います。私たち一人一人の、いんねんも含めたこれまでの通り方を見て、また、将来まで見据えた上で、その時その時にふさわしいことを教えてください。嬉し

仕上げの年

論達の実動十万件

年祭当日をうれいしい心で迎えよう

実動件数

234,066件

(11月11日現在)

立教188年人のご守護心定め			
初席者	ようばく	修養科修了者	教人
51名	23名	18名	6名
成果 (11月末現在)			
25名	11名	16名	0名

精一杯、教祖に近づく努力をして、お慕いする努力をして、それこそ自分の親の胸に飛び込むような気持ちでその日を迎えることができるように、最後の最後までしっかりと通らせていただきましょう。そのことをお願いして、今日のご挨拶と変えさせていただきます。どうぞよろしく願っています。



教祖140年祭

教祖140年祭

立教189年1月26日

年祭と年祭の経験いたしました。どの年祭も与えられた持場立場で、意識をして務めさせてもらったつもりであります。しかし、振り返れば反省ばかりです。こうして通らせてもらおうという心が続かなかつたり。教祖にお喜びいだきたい、という心がいつの間にか薄くなってしまうたり、本当に届かぬことばかりであります。今回でもまだまだできてない、そう思っています。

私は教祖百年祭の時の母親の姿が忘れられません。当時は一月二十六日から二月十八日まで、年祭の期間として毎日おつとめがつとめられていました。初日と最終日のどちらの日だったかは覚えていないのですが、おつとめの時に母がポロポロと涙を流していました。

それが忘れられません。なぜ涙を流していたのか聞いていないので分からないのですが、きっと教祖をお慕いするからこそその涙、一生懸命通ってその日を迎えたからこそその涙だったと思っています。母も、もちろん教祖をその目で見たことはありません。でもそんな涙を流せるのでありま

す。お姿を知らないから、お声を知らないから信じきれない、慕う心が弱くなる、と言っているようでは、後々の人が安心して通れるようにと、五十年のひながたを残してくださった教祖に、何か申し訳ない気がするのであります。

今私たちは、「おやさま」を漢字で表す時には「教祖」という字を書いています。「教祖」という字を「おやさま」と読むことは、今から八十年近く前、現在の「天理教教典」が作られた時からだと聞いています。

それまでは「おやさま」中山みき様のことを「教祖様」あるいは「おやさま」とお呼びすることがあったのですが、「教祖」という字と「おやさま」という呼び方をつなげたのはこの時だったようです。

ある辞書を開いてみますと、「教祖」という言葉の意味は「ある宗教、宗派の創始者。開祖」と記されていました。教祖は、親神様の御教えを私たちに伝え、この道をおつけくだされた方でありますから、「教祖」であります。また「おやさま」は私たちの親でやらせられるお方ですから、

「おやさま」と呼びするのは自然なことであります。「教祖」という意味と「親」という意味を一つの言葉で表現する「教祖」と「おやさま」。この二つを結びつけられたのは、この教えを始めてくださった「おやさま」は私たちの親なんだという親しみをもって持つてもらいたい、という思いからだったのではないかと思っているのであります。

これも二代真柱様の著書である『続ひとことはなし』という本の中に、教祖がお姿を隠される前は教祖のことを「おやさま」あるいは「かみさま」と申し上げていた、と古い先生が語られていたと記されています。

さらには教祖殿にお参りするのを、「おやさまへ参る」と言ったりもしていた、とも記されてありました。「おやさま」というのは、「おやさま」がなまった言葉だと思えます。「おやさま」「おやさま」という呼び方にはどこか私は温かさを感じます。私にとってもこの「おやさま」というのは、子供の頃から耳慣れた懐かしい言葉でもありますし、意識

はしていませんが、きっと今でも知らないうちに自分で口にかけていることがあると思います。

最初の方にも申しましたが、私は教祖は私たちの親だと思っています。親だからこそ、単に優しいだけでなく、時には厳しく、でも温かく、深く、広く、親心いっぱい私たちを見守ってくださっていると感じています。

おふでさきに
にんげんのわが子をもうものをなぢ事　こわきあふなきみちをあんぢる　（七一九）

私は、親神様・教祖と私たちの関係を、人間の親子の関係と同じように考えると分かりやすいし、神様の親心も想像しやすいと思っています。

私たちが自分の子供のことを大切に思い、いろいろな心配するのと同じように、親神様、そして月日のやしろたる教祖も、我が子である私たちのことを可愛く思い、神様の目から見て、危ない道に彷徨うことのないように、あれこれとお心を配ってくださっているのでありましょう。

昔と今では、人間の子供の

▼直轄所屬・三幣晶の靈様の5年祭が11月30日、大教会の祖靈殿にて大教会長祭主のもと執行された。

○初席者
(5名)

○中席者

誠綱	誠綱	陽光	直轄	直轄
工藤	工藤	村田	大畑	大畑
啓介	好子	芙美花聖	遼平	

(6名)

○教人資格檢定講習（全期）
受講者 網新 椎木 勝
誠綱 中島 義博
○教人資格檢定講習（全期）
修了者
直轄 大畑 周子
○別席傍聴願（3名）

○別席傍聽願
(3名)

育英会寄付者

直轄勝又大輔
徳道奥村謙一

姉崎真理子様（父一年祭）
三幣健志様（長女五年祭）

大教会11月の動き

誠 綱 倉 井 悠 永
○おさづけの理拝戴者(5名)

1日	役員会会議
2日	ようばく一斉活動日

直轄
德道
奧山
村崎
謙邦
一夫

3日 網走支部会場
婦人会委員会

誠綱宮本武

9日 網走支部例会会場。

誠綱倉井悠承

10日 役員会会議

○修養科修了者（12名）

11日 世話人先生御到着。

直轄瀬川とく江

す委員会會議。

直轄米田裕子	直轄田中雙
--------	-------

12日 育成音音会
月次祭。

直轄山崎邦夫

世話人先生御巡教。

5 年祭祭主つとめる

30日 会長、三幣晶の霊様

29日 大教会一斉活動日。

藤山重善役員、本部
申殺奉土つとめる

27日 会長、かなめ会出席

結城和広役員、本部

26日 本部月次祭遙拝会
長、教区主事会出席

24日 会長、本部神殿奉仕
つとめる

日 計月2回 糸の仕込

23日 日まで）
会長、おぢばがえり

22日 修養科事後研修会ひ
ながたセミナー(23

宅まわり(22日まで)

21日 会長、札幌方面信者

17日 網走支部婦人会例会
会場

20年祭参拝。縦の伝道日

（16日まで）
16日 会長、板倉知雄先生

15日 会長、おちばがえり
少年会おとまり会

ろこびセミナー（15
日まで）

13日 教会長夫妻練り合い
修養科事前研修会よ

役員会会議。連絡会

立教188(令和7)年人のご守護成果表（11月末現在）																				
教 会 名			初席	中席	ようぼく	修卒	教人	婦参者		教 会 名			初席	中席	ようぼく	修卒	教人	婦参者		
								当月	累計									当月	累計	
直轄			5	22	3	5		12	123	誠央		1	1					1	24	
美幌									7	常道									2	
女満別			1	1				3	57	徳道		1	5	1				6	52	
斜里町									2	満金			1						3	
釧厚						1			12	網安			1						1	
武士						1			9	オホーツク		2	2						14	
常呂				1				1	49	網徳									4	
旭網			1	2					17	栗沢			6	1	2			1	32	
御料				2	1			3	9	徳元			1	1					18	
東藻琴									1	網盛			1						5	
陽光			2	1				1	20	網新		1	6			2		3	18	
呼人								1	13	網葉									1	
誠陽				2				2	8	網陽									12	
網栄				1					6	誠網		7	26	4	5			15	81	
實東			2	2				1	51	網次		1	7						27	
東網			1						7	網昇			1					1	27	
宗稚								1	17	勇走								1	13	
										詰所								4		152
初席		中席		ようぼく		修卒		教人		婦参者		当成果		当成果		当成果		当成果		
5	25	14	92	5	11	12	16			57	894									

秋季大祭 11/12(日)						
〈参拝者数 約 120 人〉						
神殿講話	賛 者		指図方	扈者	祭主	祭員
久保先生	遠藤三郎 安澤澤 岩田原 清水信喜	結城和広	小松雅人 大山篤志	大教会長	祭典	
胡三味琴 弓線	小す太拍ち りゃん笛 が 子んぼ 鼓ね 鼓木ん	地 方	てをどり			役 割
藤澤丸山 田山のり 道裕子 子子	大結藤丸澤瀬 山城山山田川 雅和重一忠定 人広善徳和自	栗三久 林幣幣 徳正先生 正志生	藤三太細新大 井幣教会木川 道輝夫長善正 惠子人信人長	座りづとめ		
結斎藤 城藤山 美和知 子子理	遠小桐遠青小 田針谷藤山松 眞敏善明正篤 明文広広博志	新昔三 川原幣 正明正 美広志	青三山清吉三 山澤崎水村幣 由 聖美篤信光敦 子子子代喜正志	前半		
栗眞三 林壁幣 直香美 美織子	遠安清永三村 藤藤水井澤井 浩光知康春 二広幸幸雄実	三清眞 幣宮壁 敦秀正 志明教	新三瀬栗奥岩 川幣川林野原 千穂有祐徳直 子子子子正治繁	後半		